



Title	林良齋研究
Author(s)	木南, 卓一
Citation	懷德. 1959, 30, p. 41-61
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90337
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

林良齋研究

木南卓一

一
林良齋は江戸時代の末期に、四國の多度津に出たすぐれた儒學者である。その名は從來餘りひろくは知られてゐないが、元來陽明學によつて道に志して學問に勵み、大阪に出遊して大鹽中齋の洗心洞にも學んだが、篤實眞切な思索求道の功を積むに至つては、朱子學・陽明學の區別を立ててその異同を論ずるといふのではなく、兩者の長處をよく學んで、道德宗教を一にしたやうな純粹で高明な境地に達したのである。

同じ頃、山陰但馬の青谿書院に在つて眞摯に學道に勵んでゐた池田草庵は、良齋を訪ねて深く相ひ契ふところがあり、それ以來書簡の往復に虛日がなかつた程の親交を結んだが、草庵は良齋が眞實に志を立てて密々に工夫を積むところは實に古人の域に近き者と推服し、「千古の心友」と敬重した。夫の春日潜庵も草庵から良齋の高風を聞いて書簡を往復して深き交りを結んだのであるが、惜しい哉、良齋はその學漸く成つて熟處に向はんとする四十三歳の時に病歿したのである。然しその玲瓏たる人格と境地は、幕末の儒學者の中に在つて特に秀でたものであると言へよう。

良齋の傳記に就いては井上哲次郎氏の「日本陽明學派の哲學」の中に大鹽中齋の門流として簡単に紹介されてをり、又雜誌「陽明學」(八十號)には石崎東國氏の勞作「自明軒林良齋先生傳」が載せられてゐて、これによつて我々は良

齋の傳記に就いて詳しい點まで知ることが出来る。而して石崎氏も述べてをられる様に良齋の傳記は池田草庵の訪問、並びにその甥の盛之助の遊學の際の日記によつて、從來明瞭でなかつた點が餘程よく解明されたのである。この外眞鍋由郎氏の「池田草庵と其交友」〔先賢辭像〕所收〕にも良齋に就いてすぐれた見解を發表してをられる。以下、此等の先人の研究を承けつつ、就中石崎氏の文に益を得て、良齋より草庵へ宛てた手紙などを新たな資料として、良齋の學の生涯の内面に立ち入つて考察してみたいと思ふ。

良齋は一生健康に恵まれず、殊に溜飲や神經痛に悩んだが、この病弱が彼の學問を極めて内面的なものとした大きな理由となつてゐる様である。而して彼が積極的に自己の内面性を養ふべき學問に志したに就いては、次の三點が特に注意される。即ち、十八歳の時に陽明文錄を讀んで心をひかれた事、二十七歳の時大鹽中齋を訪ねてその學問・心境に根柢を得た事、次には、三十九歳の時池田草庵の訪問を受けて相契ふところがあつて以來、その思索が著しく暢達した事である。

二

林良齋、名は久中、字は子虛、自明軒と號した。良齋は號にも俗稱にも兼ね用ふと自ら言つてゐる。家は世々多度津藩（一萬石）の老職で、祿高は四百石を受けてゐた。文化四年に生れたが、生後三ヶ月で父を喪つた。六人兄弟で三人は夭折、長兄が父の後を嗣いだが病弱、その爲良齋が養子といふ形で長兄の退官後十歳にて家を嗣いだ。

幼少の頃の事はよく知ることが出来ないが、後年春日潜庵や吉村秋陽への手紙に「幼少の頃から讀書を好んだ。」と述べてゐる。十四・五歳頃から九龜に出て藩儒巖村南里に學んだ。南里は尾藤二洲の門人であるから、良齋も朱子學を學んだわけである。

十七歳の時藩主の知遇を受けて出仕、その翌年には拔擢されて江戸勤番となつた。時に伊豫の人で尾藤二洲の門人

であつた長野豊山が毎月數回江戸の藩邸に出講したので、良齋もこの人に就いて學び、特に月に七・八回豊山の家に赴いて學んだ。良齋の好學の様を察するに足ることであらう。豊山また良齋の人物を愛し、良齋が十八歳の十二月任滿ちて歸國する時「陽明文錄」を與へて作文の助にもせよと言つた。その文錄を抄録したものに豊山が書いてゐる序文をみると、豊山は朱子學者ではあるが、陽明學の長處を認め共鳴する所があつたようである。^(註一)良齋はこの書がたゞの文章のための書ではないことを知つたと言つてゐるが、これによつて陽明文錄が良齋の陽明學に入る契機となつたと察せられるのである。次いで良齋は我が國の陽明學者の書を見ようとして、三輪執齋の書や中江藤樹の「翁問答」を讀み、その後「傳習錄」を讀んだと語つてゐる。^(註二)

かくて良齋は歸國後は陽明學を獨習して行つたのであるが、元來蒲柳の質であつた良齋は、この頃溜飲を思つた。劍や弓を習つて運動に心懸けたが、十九歳から二十二歳頃までは殆ど常臥常藥を免れぬといふ有様で、この事が彼の心をいよいよ内面へ沈潜せしめたと察せられる。而も二十一歳の時に母を喪つてゐる。孝思の篤かつた良齋の歎きは蓋し大であつたらう。

二十三歳の時藩主の知遇の厚きによつて病を押して出仕したが、その年に藩主の死に遭つた。良齋は致仕を願ひ出たが直ぐには許されず、二十六歳の時漸く認められた。以後の生活に就いては、

これより門を閉ぢて客を謝し、頭其の髪を全うし、面其の鬚を存し、而して身復たは仕者の服を穿たず、蕭然として猶ほ野人の如し（池田草庵作「自明軒遺稿序」）。

といふ有様であつた。ここに唯ならぬ良齋の心事が察せられる。良齋自らも、畢竟病に托し、又實に病あり。其の間言ふに忍びざるの事あり（己酉日記）。と言ひ、草庵宛の手紙にも、

小子致仕の一件は固より病を以て辭し候事なれども、外に少し意味も御座候。

と述べてゐる。その病に托したる眞の意味は何であつたか、良齋自身言ふに忍びずとして積極的には語つてゐないが、知遇を受けし藩主の死、その後の藩政に慊らぬ心、自己の病弱、更には學問修行に専心せんとの念願等々を種々考へて自己の性命に深く考へるところがあつた故であらう。

かくて良齋の二十六歳致仕もまたその思索が極めて内面的となつてゆく契機となつたと言ふことが出來よう。而も良齋の身また「實に病ありき。」であつて、溜飲は劍や弓の修行では治らず困つてゐたところ、友人のすすめによつて一日一合の酒を飲むことによつて漸く恢方に向つた。ここに至つて彼は自己の靈性を陶冶せんとの意氣甚だ昂まり、出遊の意油然而生じ、大鹽中齋を訪ねたのである。

三

良齋は二十七歳の秋（天保四年）にはじめて中齋を訪ね、洗心洞に三・四十日滞在した。中齋は時に四十一歳、三十七歳の時に官を退いてよりその學問思索に精彩と徹底を加へんとする時であつた。後年池田草庵が良齋を訪問した時、良齋は中齋の氣魄の大なる様子を次の如く語つてゐる。

中齋平生精神氣魄極めて盛なり。時に晝夜寝ねざるもの十餘日、精神故の如し。常には酒を飲まず、飲めば則ち斗升を盡して平日に異るなし。飯は一度に十杯位。凡そ路を行く三十里、夜は常に八ツに起きて天象を觀る。門人を召して講論するに、冬日と雖も必ず四面門戸を開いて坐す。門人皆堪へず、而も中齋依然として以て意となさず。

其の氣魄の人を壓する、門人敢へて仰ぎ視ず。其の家に在るや賓客來りて虛日なし。又自ら起ちて門人に武技を教ふ。終日多事にして其の讀書該博なる此の如し。抑も亦怪しむべきなり（盛之助の筆記）。

この様に肉體も精神も極めて旺盛であつた中齋に比べて、病漸く癒えたりとはいへ、良齋は餘りにも虚弱な肉體の持主であつた。然しその純なる内面的精神に於ては深く契合するところがあつたのである。良齋は「當時門下に向讀

書人なかりき。」と言つてゐるのを見ると、この時良齋は已に一箇の見解を具へてゐたと察せられるし、中齋が良齋に囑望したところも大きかつたらう事も想像に難くないのである。更に眞鍋由郎氏の文によれば（『池田草庵と其交友』）、天保七年の春（良齋三十歳、中齋四十三歳）に良齋は再び洗心洞に遊んでゐる。林家にはその時に中齋が書き與へた「自明軒」の扁額が残つてをり、「天保丙辰之歲春三月洗心洞主人」の落款がある。又その他良齋歸國後に與へた手紙もあつて、兩者の交りの深かつた事が察せられるのである。（天保七年は中齋が義舉を起す前年である。）良齋が中齋から承けたものは根本的であつた。後年吉村秋陽に與へた手紙に良齋は、
年^{おと}殆^{おと}ど三十^{おと}にして始めて其（博く書を読むこと）の心身に益なきを悔い、因りて諸書を屏け去つて専ら諸^{これ}を四書に求む。竊かに謂^いへらく、聖人の學は無我を以て的と爲し、慎獨を以て功と爲す。聖賢時に因りて教を立つ、其言同じからずして其の要領歸宿を求むれば、獨に事あるにあらざるはなし云々。

と述べてゐるが、年殆ど三十歳の頃は正しく彼が中齋に學んだ頃である。そして無我の思想は中齋の太虚の思想と同一根柢に立つものであり、慎獨の説は中齋の懷刑の説に由來することは明瞭である。中齋が懷刑といふ事に深い考察を示したのは良齋の訪問の二年前で、中齋が「聖人曰君子懷刑小人懷惠。」と大書し、それに續いて自己の考を細書している大幅がある。その中に、

蓋し道は須臾も離るべからず、而して心道を離るれば則ち必ず惡に陷る、惡に陷れば則ち躬已に刑中に在り、而して特發露せざるのみ。……是の故に學者眞に刑を懷ひて道を離れざれば則ち但に夫の人の刑を免れざるのみならず、天刑も亦必之を免れん。

と言つて、書經や孝經に五刑之屬三千といふ、その刑を懷つて戒慎恐懼することが慎獨の根本であり、君子となるべき修養であると論じてゐる。而して良齋はこの懷刑の説を承けて次の如く言ふ、

五刑の屬三千、世の宿學と雖も試みに自ら日用念慮の微を細檢すれば、能く刑外に超然たる者幾^{いくばく}かある。一念の

不善未だ刑に即かずと雖も既に刑中の人たり。爾の所生を忝めずと謂ふべけんや。況んや縦たとひ幸に人刑を免るも能く天刑を免れんや。故に懷刑の要は唯だ自訟愼獨に在るのみ。

この兩者の言葉を比べてみる時、良齋が如何に中齋に深く承けてゐるかが察せられるであらう。

然るにこの懷刑を説いた中齋は義舉を起して斃れた。時に良齋は三十一歳、致仕してより已に五年、意を政治に絶つて病ある身をいたはりつつ自己の性命を深く自覺してゐる良齋は、中齋の死に遭つて慙々沈潜して行き、中齋によつて力を得たところを純粹に深めて行つたことであらう。太虚といひ無我といひ、更には天刑といふ、ここに宗教的な境地が開かれてゐることを察知し得る。

勿論、良齋が中齋の許に學んだのは前後二三ヶ月の事であつて、彼が中齋の思想を深く把え得たに就いては、彼自身の學問・境地の深さを重視すべき點も大いにあらう。三十二・三歳の時の偶成と題する詩に、

一念微かに萌す處、言ふを休めよ物の窺ふなしと。此身硝子に似たり、肺肝萬人知る。

とある如きは、良齋の深い境地から生れたものである。此の高明な境地の體認は然し「頻りに失ひ頻りに復す。」といふ告白にもみられる如く、良齋にとつて容易なものではなかつた。良齋のこの詩によつて、彼の三十歳臺の修養が如何に眞劔なものであつたかを知ることが出来るであらう。

四

沈潜的な思索求道の日々を送つてゐた良齋の境地を一段と飛躍せしめたものは池田草庵の來訪であつた。時に良齋は三十九歳、草庵は三十三歳、熱烈なる求道心を抱き乍ら、多度津と但馬に索居、寂寥を味つてゐた二人は互に知己を見出した。そして「徳孤ならず必ず隣あり。」の語を眞に味つたことであらう。草庵が良齋の名を知つたのは何時か、如何様にしてであつたか、草庵自身は何も語つてゐないが、恐らくその二十歳臺京都に遊學して春日潜庵と學問に勵

んでゐた頃であらう。そして當時伊豫にゐた近藤篤山の高名を聞いてゐて、篤山に面會する事の期待の方が遙かに大きかつたのであるが、篤山には物足りなく感じ、良齋とは豫期以上の親しい交りを結んだのである。當時多度津藩では他國の者と自由に面會することをその藩士に禁じてゐたが、村山彦兵衛なる藩臣の盡力によつて漸く許され、極く短い時間しか會ふことが出来なかつたのであるが、心が深く通じ合つたことはその翌日草庵が良齋へ送つた手紙によく察せられる。

誠に初めての拜謁に御座候へども、臭味の同處、舊來の御懇意の様に存ぜられ、扱々懷しき事に存じ奉り候。御惣門の禁さへ格別嚴しくも無之事にて自由に出入も相叶ひ候事なれば、今朝も尙又罷出種々御窺申し度き事も有之候へども、致し方も無之残念の至申す方なく存じ奉り候。以後御忘れ置も無之候はば御惠音相待ち申し居り候。拙生方よりも御通信申し上げ度き存念に罷り在り候。海内僅々の同志、實に骨肉の様に存ぜられ、古へ王門の諸子ども相慕ひ候事など思ひ出し申し候。……山河相隔て候ても志さへ同じき事なれば、畢竟千里比肩、何となく相勉勵の助けとも相成り、扱々喜しき事に御座候。

草庵の喜びと期待の様子がよく察せられる。以後良齋の死までの四年間は書簡の往復に虛日がなく、その志と學問とは洞然として隔てがなかつた。良齋は右の手紙を得て、「彼此の情約せずして同じ。」と喜び、「斯の道宇宙に通じて間隔あることなし。苟も此の志を同じくせば萬里神交、夫れ何の遠きことあらん。」と述べてゐる。此の訪問の際に良齋は懷刑の説を草庵に示し、且つ大鹽中齋の氣魄の大なるを語つたのである（第三節に引用）。

草庵は更に二年前京都で春日潜庵を介して知り合つた吉村秋陽を廣島に訪ねた。この時草庵は良齋の「高明篤信好學の様子を具さに説いた」（秋陽より良齋への手紙にいふ）。その歸途京都に上つて草庵在京時代の十餘年間の親友である春日潜庵を訪ね、良齋の事を語つた。後、潜庵が良齋に初めて送つた手紙の中に、その時のことを、「草庵は喜氣が言葉や顔色に溢れてゐた。草庵は平素は輕々しく喜ぶ性格の人ではないのに、今彼が如何にも嬉しうである。そ

れは思ふに切瑳琢磨の良き友を得たからであらう。これは私にとつても嬉しいことである。」と述べてゐる。

かくて良齋・草庵・潜庵・秋陽といふ幕末に於ける最も眞摯に學道に志した四人の陽明學者の文通が始つたのである。草庵は但馬の山中での寂寞を慰め、自己の進學に資せんとして、四人の往復書簡をあつめて「鳴鶴相和集」と題し、互に遠く山河を隔ててゐても志さへ眞實であれば遂には文通交の始ることを喜んだのである。而してこの集に收めてある十一篇はすべて良齋に關係するものばかりであつて、これによつて草庵が如何に良齋を推服したかが察せられる。

良齋はその三十九歳の秋に圖らざる草庵の來訪を受けてその境地も進んだことであらうが、更にその翌年、友人の援助を得て兼ねてからの願であつた講學のための書院を建てた。野を背にし海に面する堀江の里弘濱の原に地を擇んだので、弘濱書院と命名した。「唯數人の門弟が日に來つて門を叩き、相與に此の學を講明し、復た一語も世情に及ぶことがない。」といふ有様で、良齋の隱居して以て志を求めんとする純な氣持も推察出來よう。良齋は書院の略圖を草庵に送り、書院記を依頼した。草庵はその圖を壁間に掲げてその勝概を想像し、良齋の心事を想つてその記を綴り、昔王陽明が山水の間に逍遙して弟子達を啓發したことを想見した。(註三)

然るに、その學問・境地の愈々精深ならんとした良齋は此の頃又健康を害した。草庵への手紙に、

元來病身者の所、三十位より少々強壯に罷り成り居り候所、一昨年頃より又々少し病弱に相成り、常々胸下に溜飲御座候。既に此の夏書院へ罷り越し居り候所、井水の異なるに傷られ難澁仕り候毎に、藩中の弊廬に罷り歸り候。

何卒療養を加へ兩三年之内今少し康強に相成り候へば、必ず播州より山陰へ入り尊館に參上、以來の疑ども質し奉り、歸り掛け京師の方へ路し源子贊(潜庵のこと)へも一面仕るべしと心に期し罷り在り候。

と言つてゐる。此の頃から彼の健康はますます衰へて行つた。溜飲の外に神経痛・頭痛・動悸昂進等も加つて、草庵や潜庵を往訪することが出來なかつたは勿論、四十三歳の五月に逝去した。

良齋の訃報を受けた草庵の歎きは側の見る目も痛ましい程であつた。「祭林良齋文」によれば、その訃報の至るや覺えず地に伏して慟哭した。家人その哭聲を聞いて慰めんとしたが、我がこの悲しみは汝等の與り知る所にあらずと言つて退けた。そして「茫々たる宇宙、孰れか能く我が今日の痛苦を知るものあらん。」と歎いた。平生喜愠の色を容易に表はさぬ沈潜嚴毅、溫厚朴實なる草庵も、良齋に初めて會つた時と、良齋の訃報を受けた時とは例外であつた。その翌年、草庵は良齋の遺稿を集めて、文二十、劉記二十六、詩十五を得て、「自明軒遺稿」と名づけ、自ら序文を作つて上梓した。

五

良齋の人柄なり學風なりをより詳しく知るために、草庵が友人達に送つた手紙の中の良齋に就いての言葉を中心として考察してみたいと思ふ。

草庵が吉村秋陽へ宛てた手紙に、

此人讀書の功は如何と奉存候へども、何分用功の處親切に相見へ、毎々手紙を差越くれ候度に、被相襲候様の氣持いたし、近來の益友と奉存候。

と述べてゐる。良齋の著實精密なる工夫は前述の懷刑の説や偶成と題する五絶にも窺はれるが、又後に觸れることにしたい。右の手紙の中で、草庵が襲はれる如き氣持がすると言つてゐるのは實感をよく言ひ表はしたものであらう。

良齋の死に際しては、

林良齋事當年五月四日に死去いたし、扱々不堪悼惜の情に候。拙生一見以來不斷書通いたし、近來は情好益々相悦び申居候。殊に此人御示の如く交友中にても尤も着實精深の工夫有之、平素相切磋いたし候事ども、皆々自己經歷中より工夫を相用ひ候事多く、平生精思力踐と申す氣味有之候。拙生如き平生口耳知解の學のみいたし候者には尤

も對症の藥と毎々警策不少候に、扱々殘念大いに助を失し、實に不堪悼惜の情に候。

と言つてゐる。草庵も春日潜庵と共に二十二・三歳の頃より宋明性理の學に志し、劉念臺の慎獨の説を喜んだ人であるが、この草庵をかく迄に感服させ、口耳知解の學と反省させた良齋の純粹で著實な修養を想見すべきであらう。草庵が次第に靜坐の工夫を重視して行つた事も良齋の影響によるものであらう。又「其歿後は警惕の話を聞き候事も少く扱々惜しき事に御座候。」とも言つてゐる。良齋歿して十二年を経た後にも、謙虛に道を修めるべきを感じては、

此様の處、亡友林良齋用功尤も遂密、古人の風彩深く相見え申候。今に至り時に想念する毎に感涙を催し、其人を惜み申候。

と、心から亡友の死を惜しんでゐる。秋陽も良齋の着實なる修養に敬服し、世間の學者の風に慊らぬ時には良齋を想ひ出しその早世を悲しんでゐるのである。

春日潜庵も良齋のことを草庵からきき、その文を読み遂には書簡を往復した。兩者の手紙は「鳴鶴相和集」に收められてゐて、共に感激して道を語り、よき友を得た喜びを述べる長文のもので、一讀して感銘を受けるものである。

草庵への手紙に、

本月朔林良齋の書を得たり。其の交りを結ぶの意倦々切摯、且つ其の工夫着實精深を觀る。方今友道彫喪の時、斯の如きの人得難しと謂ふべし。今其の交を獲たり。此乃ち子敬（草庵のこと）の賜にして平生の幸なり。

と言つてゐる。その良齋の死を悲しんでは草庵に、

林良齋丈去る五月四日の夜逝去の由、誠に驚き入り痛惜の事に存候。老兄は幸に一見に及び候處、拙は年來思慕罷在候て不及一見、此生大遺憾に存候。……扱々人命は脆弱意外の事共出來候ものと存じ、惕然に不堪候。此の良友を失ひ歎惜不少候。

と送つてゐる。

又、草庵が若き頃よりの親友で、折衷學派の猪飼敬所に學んだ小島省齋に送つた手紙に、

林良齋も不相變時々通信致し候。是も篤志の様子當時右様に親切工夫を着け候者は學者中定めて稀に御座候はんと不堪推服候。文章も時々差越し候。文章も習ひしに無之ては中々善く出来感心のことに御座候。却て文章家の文よりは切實にて大いに道氣有之、毎々見る度に警惕の意を生じ妙に奉存候。大いに修靜に骨折候様子に相見へ候。一昨年來大いに益友を得候と扱々頼母しく存候。

と、その篤志にして有道の人たるを推奨してゐる。又、

一昨日林良齋正月初旬出の書面到來、不相變精進の模様大いに警惕の念相生じ申候。右良齋深く聶双江・羅念菴の歸寂の旨を相悦び、其下手の處は尤も劉念臺の訟過法と申すものを感服信用致し候旨に御座候。毎々感心のことも多く御座候。

と述べてゐるが、これを良齋より草庵への手紙に就いてみるに、右の見解を述べ、その續きに、

如何となれば、吾人不逮の質を以て凡を超え聖に入らんとすれば勇によらずんば至り難く、其勇を起すは恥を知るにあり、恥を知るは内自ら認めて其躬を置所なく存するより始り候歟と存候。此の恥を覺え候上は、孟子の禽獸而已等の言直に吾を罵り候様に思ひ、此の恥を覺えざる時は唯他人の事を誹る様に相覺え、激勵の言も身に染み不申、其の段此の訟過の一法は質の強弱知愚に不拘相用候て弊なき方かと存候。尊兄は如何思召候哉。

と言つてゐる。所謂著實精深にしてその修養の古人に近き者といふべきものであらうか。此の様な點に就いての良齋の考は更に後に考察することとして、右の良齋の手紙の續きに更に次の様に言つてゐる事に注意したい。

拙生儀先般家慈之忌日に當り、ふと豚兒ども所持の養草の圖詞を読み、心に當り感泣に不堪、其後朋友へも相示候處、中には即坐に涕を落候者も有之に付き、申談上木仕り、社中の童子共へ一紙づつ相贈り、常々目仕候様致させ候。尤も詩と近溪の説並びに童子讀書の圖は増補に御座候。尊塾中にも定めて御童生も可有御座と存候に付少々

進上仕候。御同前に父兄に棄てられ候身にては多讀に勝へず候。

ここに良齋の孝思の篤さとその性格の情意的な一面をよく察することが出来る。ところが右に引いた草庵より省齋への手紙の續きに此の事を報じ、その一枚を進呈し、實はこの圖は草庵自身も先年から深く悦び、畫家に書かせて兩親の忌日などに床の間に掛けたならば、父母の極まりなき慈愛の様子を偲ぶのによからうと思つてゐたのであつたと述べ、それ故良齋の今回の上梓に深く感銘したと言つてゐる。草庵は良齋から贈られたこの圖を表装して終身壁間に掲げて、一には父母の思に感謝し、一には心友を偲ぶよすがとしたのである。良齋と草庵との感應道交の密なること至れりといふべきである。省齋宛に良齋の死を報じた草庵の手紙に、

拙生先年面晤以來大いに懇意に相成り、學問人品等に益友を得、生涯の幸と迄存じ罷在候處、右の仕合誠に誠に殘念申す方なき計りに奉存候。初めて（訃報を）聞き候砌は不覺慟哭、其の後毎に人に對し話し致候度に不覺涕泣罷在候。

と言つてゐる。かく迄に草庵や潜庵等の幕末に於ける眞摯な學者達にその死を惜まれた良齋は、その人品なり學問なりの如何に優れてゐたかは察するに餘りあらう。

六

良齋の傳記の詳しい點が、草庵の甥盛之助が良齋の許に遊學した際の己酉日記によつて明かになつた事は前述の如くであるが、その日記には良齋の思想的な面を知るに足る記事もあるので、これを考察しつつ良齋の根本的な思想を解明したいと思ふ。

盛之助は十三歳の時、當時京西松尾山中に隱栖讀書中の叔父草庵を訪ねて來てその指導を受け、又草庵の親友春日潜庵にも學んだ。以後常に草庵に従ひ、草庵が良齋を訪ねた時も他の二人の門人と共に従つた。そこで今回の遊學は

四年振りに良齋の讐咳に接することになるわけである。時に盛之助は二十四歳、草庵・潜庵の指導を受け、良齋の人物を慕つてゐた彼は、極めて眞摯な求道心に燃えた青年であつた。草庵としては平素農事に忙しく、兎角讀書思索に暇なき盛之助に一段の進境の機を得させたいとの氣持であり、兼ねては四年前に短時間しか會ふことが出来なかつた良齋の日常の生活態度や意見を更に詳しく知りたいと思つての事であつた。時に良齋は四十三歳、即ちその歿年に當る。更に詳しくみれば、盛之助は正月二十三日に但馬を出發して、二月七日に弘濱書院に到着した。約一ヶ月の滞在の後、三月六日良齋の許を辭し、大阪に出、更に京都に行つて春日潜庵にも久し振りに會ひ、又丹波に小島省齋を訪うて四月四日に歸宅してゐる。而して良齋はその一ヶ月後の五月四日に歿してゐるのであるから、盛之助が良齋を訪ねてその傳記的な面や思想的な事を聞いて記録したのは、まことに意義深いことである。（因みに、この盛之助もその二年後、草庵が江戸に佐藤一齋を訪ねた時にも從遊し、その歸途病を得て二十六歳の若さで歿した。）

さて、足掛四年振りに好學の青年盛之助を迎へた良齋は、

所謂喬木を下りて幽谷に入る者か、非か。我實に不學にして術なし。恐らくは以て子を益することなからん。

と言つて極めて謙虛であつた。然し心友の甥にして篤志好學の青年を遠く但馬より迎へて、良齋はその教導の勞を惜まなかつたであらう。その健康は正月の二十日頃から頭痛や眩暈が起り、日々困つてゐたものではあつたが、努めて書院に來て盛之助を指導したのであつた。その初めて會つた日も靜坐の話をしてゐるが、後述の如く靜坐は良齋の修養に於て極めて重要なものであつた。盛之助も毎日靜坐を缺かさず、日記中の重要な記事としてゐる。十日の日記には、靜坐の功を御吐し有之。且つ極めて堅苦を忍ばずんばあるべからざることを御吐し。今日の學者は只是れ欲上人の一念のみ。此の念を取除きて別に目當てにする所ありや否や云々。至つて親切なり。

と記されてゐる。堅苦の語は朱子がその死に臨んで門人に遺した語である。この語は良齋が病苦に絶えず悩まされながら濫れることなく修養に努めた點から考へても意味深いが、より正當には「古人の一年工夫を用ひて進み候所を吾

人も十年かかり候へば追付かぬと申す筈は有るまじ。」と考へて努力する事とみるべきなのである。而してこの意志の強さも右の「別に目當てにする所」がなくては無意味である。良齋はこれを志と辨ずる事と考へる。草庵への手紙に、古人は學問の始に先づ志を辨じ、己が爲にする主意丈夫に立ち候ゆゑ、讀書の外にも見る事聞く事何によらず皆々この己の爲にするの助となり申候。吾人は兎角欲上人の一念を主意とし目當として學び候ゆゑ、終日の接る物并に聖賢の書を読み候迄も残らず欲上人の助となり申候。今の人は大抵欲上人の一念を除き候ては外には何にも目當と致し候樂は無之跡に御座候。這般の心術ゆゑ學べば學ぶ程矜の病を添へ、十年前と今日と考へ合せ候へば、聞見知識は長じ候へ共、心の位は却て一二段も降り申候。全く始の目當主意の立て方間違候ゆゑ大なる損を取り候かと存候。

と述べてゐるのによつて、右の日記に記された良齋の短い言葉の眞意を理解することが出来るであらう。この志を辨ずる事に就いて良齋は陸象山の白鹿洞書院での講義を最も尊信すると言ひ（草庵への手紙にて）、盛之助の日記にもその由及び此を以て良齋が學ぶ者の最急務と言つたと記してゐる。而して志を辨ずるとは一面自分の心の位の低きを恥ぢ、自己の過ちを認め反省する事であり、一面積極的に聖賢の教によつて自己の心性を養ふことである。

先づ省察の面に就いて考察してみるに、盛之助の日記に、第三節に掲げた良齋の偶成の詩即ち「一念微かに萌す處、言ふを休めよ物の窺ふなしと。此身硝子に似たり、肺肝萬人知る。」に就いて良齋が、試みに此身を硝子にしてみると我が肺腑中の見苦しき事如何ぞや。

と言つたと記してある。この詩とこの語とによつて良齋の省察の如何に徹底してゐたかを察するに足るであらう。日記には次いで、

平生自己心位何處にあることをみるべし。

と言つて良齋が懷刑の説を擧げたことを記してゐる。(註四)

良齋の右の省察は大鹽中齋の説から得るところあつて、その上に獨自の省察を加へたものであるが、良齋は更に劉念臺の訟過の法を尊重し、この法によらずしては學問の正路を得ないと言ふ。それには自己の過ちを認め、恥かしく思ひ、其の躬の置き所なく思ふ程に徹底しなくてはならぬとも言ふが（前に引用）、更に曰く、

吾人の工夫吳々も勇猛に無御座候ては己に克ち候儀出來難く候。吳王の復讐に、出入に人をして汝越王の汝の父を殺せしを忘れたるかと呼ばせ候よし、誠に情心に鞭ち候妙方と奉存候。吾人も此の意に倣ひ、平日我が心中尤も羞かしく人に對し言ふべからざる病痛を一ニ條に書き、人の呼ばふ辭を設けなし、靜坐の節などに自ら呼び自ら答へ、嚴しく自訟仕り候へば、平素廉心の薄き者も羞惡の中より猛烈なる勇氣起り候様被存候。

良齋の省察の態度はまことに眞劍であつた。慎獨の工夫は此の様な訟過・懷刑の關門を経なければならぬといふのが良齋の主張である。日記には又次の様な深刻な良齋の言葉が記されてゐる。

閨門の内衽席上、是れ獨中の獨、屋漏中の屋漏、吾人の第一步、吾人常に此の一步を捨て、第二步より功夫を著く、丁度空に物を架する如し。用力勞し功少き所以なり。第一步より力を用ふべし云々。吾平生此の一關に誠に苦しむ。若し夫れ未だ讀まざる書多しと雖も、左まで苦にも思はず、追々讀むべし。此一段着力の處、どうも礎と取定めのなきゆゑ、ただ子敬（草庵）に一面相談晤致し度き旨、種々親切の御吐有之。

良齋よりみれば讀書は慎獨の第一步の功夫に比べるならばその意義は小さいものであつたらう。讀書はこの省察の助けとしての意義を持つものとも言へるであらう。この態度が草庵をして深く感悟せしめたのである。而して右の言葉は盛之助の送別の小宴の際に語られたものであるが、日記の最後に良齋に聞く所を草庵に傳へた所、「妙契多し」とあるのは、右の如き言葉に就いてであらう。

七

慎獨・訟過・省察の功夫によつて眞に志を立て修養の道に入ることが出来るのであるが、その省察に於て我が心の良知が現前してゐるのである。自己の過ちを反省し恥づるのは即ち我が心の良知の覺醒である。而してこの場合慎獨・訟過を経ないで良知の現前現成によつて物に執はれ名利に惑ふ心を超脱することを説くのは、その境地が異つてゐるのを注意しなくてはならない。良知の現成による超脱的境地を説く事も修養に有益ではあるが、我々は常にその様な境地に立つ事は直ぐには出来難い。又「徒らに光景を玩弄する様に陥り、古の良知を見付け候義は六ヶ敷し」くなるのである。それ故日常の生活に於ける過ちを反省し、獨りを慎しみ、靜坐してその反省・戒慎を心に憶念して功夫を積んでゆく事が必要となる。それによつて我々は事に臨んで十分に良知のはたらきを現はすことが出来るのである。池田草庵が良齋の修養を著實なりと推服したのは此の様な良齋の考の故なのであらう。

良齋の著實な修養に就いて更に考察してみよう。草庵への手紙に、

酒掃應對便ち是れ精義入神ゆゑ、事に大小あれども心に大小はなき筈に候所。兎角小物を忽略致し候義、是又吾人の通病と存候。兎角席不正不坐、割不正不食、其餘一物の置所も嚴正に致し候所より、平日心を正に習はせ、段々に積み上げ申さずては、大事に臨み候て此心力なく何事も苟もするものと存候。苟の一字吾人日用間の大病痛、此を去り申さずては慎獨の學とは申し難しと存候。

と述べてゐる。平素の涵養鍛鍊なくしては、大事に臨んで力なく苟もする所ありとの考は正しく良齋の著實なる考へ方を示すものである。^(註五)而してこの苟もせず、我が心の良知を涵養するのは靜坐の修養が最も大切であると良齋は考へる。省察・訟過・慎獨は靜坐といふ場に於てなされねばならぬと良齋は考へるのである。

靜坐に就いて、草庵への手紙に言ふ、

靜坐の工夫、龍溪の所謂不守之守・不著之著、このうち自ら活潑の所ありと申す所、至極正面の所と存候へども、吾人中に置ては至り難く候に付き、先づ古人切要の言平日心に感じ入り候箇條を心頭に横へ、他の妄念を去り申し、畢竟は先づ姑く以此易彼の手段（を用ひ）、易へ得盡して一妄念も生ぜざる時、漸く不守之守・不著之著の場に至り申すべしと存候。愈々右様に相心得宜しき儀にや。尊兄靜中御工夫の成され方、後便に御垂示願ひ奉り候。

この修養法は前述の主意目當を定めるに就いての積極的方法とも言ふべきものである。^{（註六）}直ちに龍溪の説く高明の境地を取らなかつた所に良齋の見解があり、雙江・念菴の歸寂の説を著實の學問と稱揚した所以がある。盛之助の日記にも、

子敬（草庵）平居靜坐の功如何。我試みに此の藥を服すること年あり。畢竟靜なりと雖も思なき能はず、惟だ不正の念を禁ずるのみ。我が胸中をして閑思慮なからしめば則ち千思萬念すと雖も亦靜なり。若し此に於て得る所あらば則ち究るなり。不著にして著、不守にして守、事あれば則ち應じ、事なければ則ち坐す。坐する時舊に仍つて不著之著・不守之守、手を犯し力を著くるを須ひず。

不守之守・不著之著とは良知現前・常惺々の究極の境地である。これは正しく絶對的境地であるが、己酉日記に、四時行はるは學んで厭かざるなり。百物生ずは教へて倦まざるなり。所謂衆理備りて萬事出ずるなり。一誠自然の流行なり。四時を行ひ百物を生ずるにあらざるなり。

とあるが、絶對自由の境地より言つたものである。良齋は早くより此の様な境地に觸れてゐた様である。而も此の事は良齋の著實な修養と矛盾するものではない。兩者相俟つてゐた所に良齋の偉さがあるとも言へよう。

右の絶對自由の境地は所謂誠であるが、良齋はこれを獨と呼んだ。自明軒遺稿に、天地に俯仰して他物なし、唯此のみ。故に獨と曰ふ。

宇宙の間只是れ一箇、始より天と地と人との別なし。形は則ち彼あり此あり、神は彼なく此なし、一のみ。人須ら

く我の自らは非誠偽を知る者はは何物なるかを體念するを要すべし。此を了すれば則ち餘なし。

獨とは絶對性の故に名づけられ、それは神即ち靈妙にして言ひ表はし難きものであり、常に惺々とした意識である。

良齋は中庸の誠や易の一陰一陽之謂道に説ける自らなる生機を重視するが、これを獨と言つたのは宋明の心性理の説、特に劉念臺の慎獨の説を學んだが故である。獨に就いての最も精微な良齋の説は、草庵への手紙に表明されてゐる。

やや長いが次に紹介してみたい。

小生年來一念之微何としてやらは欺くに欺かれず、背くに背かれぬ所に於て、宇宙に本來我の無き事を體觀體味仕り候。此の何としてやらは人の計らひ絶え果てたる者ゆゑ、所謂造化之精靈（にして）、天地にも生ぜられぬものと存候。此所にて靜觀仕れば一時何とやら生意流れて快なる氣象相覺え候へども、久しからずして私起り私立て對する者出來、此の氣象を取り失ひ、愧づべきの至に存じ奉り候。全く體味の底に徹し申さざる故と存じ居り候へども、萬一は工夫の致し方其の道を失ひ居り候にては無之かと相恐れ、當地の學者輩へ相談に及び候へども、何の返答も無御座候。唯前文通り工夫を用ひ情なく年を累ね候はば、此に止まれ候場に至り申すべきか、未だ日に新に月に異る驗を得申さず、中々歲月流るる如く、早や強仕に至り實に慙憤に堪へず候。尊兄此の所年來の御履歷御體味の御工夫如何。御經驗の方御座候はば御垂示被下度奉願候。

この文によつて良齋が如何に眞面目な態度で修養に志したかを知ることが出來よう。絶對的な境地を劈蕪して道を得たりと思ひ上つてしまふ人ではなかつた。良齋の許にて薰陶を受けて歸つた盛之助が日記の終の部分、即ち歸省の時の反省として、

宅に入れば心則ち好からず。良齋の所謂習心を以て習境に對する者果して然り。猛省せざるべけんや。

と記してゐるのは、蓋し良齋の眞精神を體得實踐してゐるものと言へるであらう。飽くまでも謙虚で綿密な態度である。良齋は又、

獨の靈は自然にして人の業ならねば、是を本無の種子と存じ、及ばずながら功を用ひ候へども、今に屹度驗を得申さず候。

とも言つてゐる。人間性の根柢を深く堀り下げて、人爲を超えた絶對的なものに逢着せんとして、而も「習心を以て潛境に對する」人間の分齊をよく自覺したものである。此の深い體驗・苦惱は春日潜庵への手紙にもよく表はされてゐる。曰く、

聖人の聖人たる所以は無我のみ。而して吾人一點の獨知は天機の自然にして人力の得て與らざれば、則ち本と亦た無我のみ。其の我あるは乃ち意欲のみ。今意を遣り欲を消し、其の本無の天に復らんと欲すれば、他なし其の獨を愼しむに在るのみ。讀書して義を求むるも亦廢すべからずと雖も、苟も獨以て之に主たるなくんば、則ち其の玩弄喪志とならざるもの幾んど希なり。乃ち退いて一室に靜坐して、自ら日の言行する所を取り、黙して諸を獨知に問へば則ち罪を名教に獲る者蓋し夥し。凡そ世人の善となして我の之を好む者は我未だ一も之ある能はず、其の不善にして我の之を惡む者は則ち我悉く之を有す。是に於て惕然として震悚し、遷り改むる所以を思ふも、頻りに失ひ頻りに復し、未だ脂に畫き氷に鏤むるを免れず。

此の言葉にも良齋の學問の眞骨頂がよく窺はれるであらう。眞鍋由郎氏が右の文の終の部分の反省に就いて、これが「わが欲する所の善は之をなさず、反つて欲せぬ所の惡は之をなすなり。……噫われ惱める人なるかな。」と嘆じたパウロの語と符合してゐる。良齋も亦パウロと相似たる體驗を経たことを示すものであると評してをられるのは傾聴に値する。所謂學者・思想家としては右の文の前半だけでもよいであらうが、良齋はその思想を自身に生き、體認體現しようと苦心したのであり、右の苦惱はかかる人のみの體驗する所であらうか。草庵への手紙に言ふ、

兎角後儒の議論は精密に過ぎ、却つて掛論の弊御座候様思召候旨、至極御同意に奉存候。全躰道の精微は所詮言語の及び候には無之、言語を以て道の精微を説き盡し候は心得違ひと奉存候。唯一陰一陽之謂道にて渾然と漏る所な

く被存候。然し此の義工夫を用る人と言ふべくして、工を用ひざる人と言ひ難しと奉存候。

又世間の學者達が博く書を讀んで知識を蓄へ、文章に長ずることに専心してゐるのを慍らず思つては、

箇様の時に當りては我輩愈々己に反りて獨證獨修、誠を積むべき時と奉存候。決して言語を以て争ふべき事にては無御座と奉存候。

と草庵に述べてゐる。良齋の考をより詳しくし得ると共に、良齋と草庵との道交が如何に深く懇ろであつたかを察し得る言葉であらう。

(註一) 余嘗讀陽明文錄、知其意之所存深甚遠、非淺學者可得而窺也。因命子姪鈔出其文。時披而閱之、益知其精神煥發辭氣燦爛。眞大賢君子之所作、而非異端怪妄之徒所得而辭也。在我邦學陽明者藤樹菴山二子、純粹之德、經世之才、固已冠於古今。視之泰州龍溪諸子猖狂肆靡、與名教背馳而無忌憚者、萬萬如何也。然則其淫於禪寂、蕩於浮誕者、皆不善學陽明者之過、而非陽明之咎也益審矣。吁、非識見超卓達於理而遠於道者、孰知吾言之果可信哉。(石崎氏の「自明軒林良齋先生傳」に引く。)

(註二) 此等の良齋の言葉は、池田草庵の甥の盛之助が良齋の許へ約一ヶ月遊學した時の日記(己酉日記)に記されてゐて、石崎氏もこれに據つて論じておられる。

(註三) 弘濱書院記の一節に曰く、「今也又挈其書、往居乎空曠寂寞之野、如孤鶴之脫綵籠、清遠閑放、始無所累。終日兀坐、靜觀乎風雲之變幻、默察乎萬物之自得。草木欣々、禽鳥關々、内外洞徹、物我皆忘、冥然直與造物者爲徒者、是蓋君之所適也歟。昔者明王子唱此學也、點化同志多得之登遊山水間。及其官滁州、日與門人遊邀瑯琊泉間、月夕則環龍潭而坐者數百人、從遊之多自濬始。蓋人之在世也、憂得憂失、屈抑悲苦、殆如不勝。及一旦飄然逍遙乎夫山水之間、輕快脫灑、塵氛如洗、心自豁開、眞機透露。是以其言易入、其心易化、是王子引誘之微旨也。則今君之移居於此間、非特其所自適、而其所以呼唱點化於從遊之諸友者、蓋亦有如王子之當日也。云々。

(註四) 孔子曰、君子懷德、小人懷土。君子懷刑、小人懷惠。此則君子小人之心位を對觀する處也。我二十年前矢張り小人之懷、今二十年來學問をする、猶是依然懷土懷惠之小人。只二十年來聞見稍廣く身にかざりが出来る。是を以て人或は儒者學者と云ふ。今自ら其の心位を見るに猶は昔のごとし。是れ譬へば猶ほ閭里之小人の貴人の儀衛を假りて以て其の里人を欺くのごとし。若し之を朝廷の班簿に質せば則ち其の罪を逃るゝ所なし。我が輩若し之を孔子の班簿に質さば則ち更に當に如何ぞや。

(註五) 盛之助の日記に、先生曰、我夜前靜坐して四更に至る。時刻甚だ長きを覺ゆ。畢竟自ら反みるに、一の苟の字是れ吾人の一大病。一事苟もすれば則ち百事隨て苟もす。謹まざるべけんや。

(註六) 盛之助の日記に、今朝又靜坐の御吐有之。平日我不能無思。欲絶之則愈々生。不若使之思、唯可禁不正之念耳。古人之言語平日深自感服者を胸中に横へ、以拒外之雜念慮、是我所試也。